

フィリッパ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』

もう1つの時間

依岡道子

Philippa Pearce's *Tom's Midnight Garden* Another Kind of Time

Michiko YORIOKA

I

『トムは真夜中の庭で』 *Tom's Midnight Garden* (1958) の作者フィリッパ・ピアス Philippa Pearce (1920~) は、寡作であるが、その質の高いユニークな作品により、現代イギリス児童文学作家を代表する作家として数えられている。特に『トムは真夜中の庭で』について、イギリス児童文学作家で著名な批評家であるジョン・ロウ・タウンゼンド (J.R. Townsend) は、この作品を戦後の最高の傑作であると激賞している。

If I were asked to name a single masterpiece of English children's literature in the last war — and one masterpiece in thirty years is a fair ratio — it would be this outstandingly beautiful and absorbing book.¹⁾

他にも多くの児童文学者がこの本について、新しいファンタジーの傾向をなすものとして高い評価を与えている。

この作品は「時の位相」(time shift) を扱ったファンタジーである。時の位相という技法はいうまでもなくイギリス児童文学作品にみられる特徴であるが、タイムファンタジーの中には、単に別の世界の移行だけで終るものもある。この作品の特徴は、タイムシフトを単に技法に終らせず、トムの異次元世界での体験を通じて、「時間」と人生という基本的でしかも大層答えにくい問題を取りあげている点にある。

最近、児童書の分野に「時」とか死とか悪を扱った本が入り込んで来て、われわれ大人は多くの子どもから学ぶことが多いように、子どもの本から学ぶことも多い。ピアスの『トムは真夜中の庭で』も、そういった意味でわれわれ大人がこの忙しい社会で漠然と感じている「時間」についての問題を、もっとじっくり考えるためのヒントを与えてくれる作品である。しかし、作者は児童文学書の中で、時間論を子どもに解説しているわけではない。ピアスは時間の問題をどのように扱い、何を子どもに語ろうとしているのだろうか。そして大人の読者は、子どもについて何を学ぶのであろうか。

II

われわれの日常生活は日ましに能率的になっていく一方、時間をはかることは時計に任せてしまっ、時計に自分が縛られているみたいに感じることもある。時間の中で、自分の位置づ

けをすることを忘れがちである。

時間は地域によって時差というものはあるけれども、一応グリニッチ天文台による標準時刻というものがあつた、われわれはそれに時計を合わせて、日々の生活をその共通の時間に基いて送っているのである。

一日は午前午後それぞれ 12 時間であるが、『トムは真夜中の庭で』では、バーソロミュー夫人の大時計は真夜中に 13 回鳴りわたる。時計が 13 回打つのを毎晩耳にしているアパートの住民は、この時計を間違い時計だと舌打ちするくらいであるが、弟のピーターがはしかにかかったため、夏休みの 2、3 週間家を離れて叔父さんの住むアパートに滞在することになったトムにとって、第 1 日目の寝付かれない真夜中にきく 13 回の大時計の音は、少年の好奇心をそそるものがあった。

Thirteen? Tom's mind gave a jerk: had it really struck thirteen? Even mad old clocks never struck that. He must have imagined it. Had he not been falling asleep, or already sleeping? But no, awake or dozing, he had counted up to thirteen. He was sure of it.²⁾

トムは何かの予感のようなものを感じ、まるで時計にうながされたかのように、時計を調べに行く。暗闇の中で何も見えず、外からの月光を中に入れようと裏口のドアをあける。裏には狭い空地しかないと思っていたのに眼前に広がる朝の光のさす庭園を見て、トムはすっかり魅せられてしまう。翌日確かめてみるが、ホールの大時計の外見は何の変哲もないものであり、真夜中に見た庭園はなく、ごみ箱や古い車が置かれている道路しかない。こうして大時計が 13 時を告げるのを待って、タイムトンネルとなる裏口のドアを通路として庭園への往復が、毎晩続く。

子どもはいつも自分の居る場所以外のどこか別の国への冒険をあこがれるものであるから、真夜中の庭園という世界は、トムの現実の世界であるアランおじさんのアパートの狭い部屋とは違い、自由に遊ぶことが出来る楽しい場所としてトムの心を奪ってしまう。この庭園には、いろいろの不思議なことがある。庭園には少女ハティ (Hatty) の他に、いとこ達や女中さんがいるが、トムの姿はハティにしか見えなかったり、この庭園で出会う人々はその服装からヴィクトリア時代の人々であること、そして何よりも時間に関する不可解な経験である。

庭園での時間は一日のうちのいろいろな時間であり、季節もその都度変化する。最初に見た庭は「昼間の光のように明るい太陽がすっかり昇ってしまった光の時間」(... The white daylight that comes before the full rising of the sun) (p.24) であったが、次の夜には「早朝の薄明かりの時」(This grey, still hour morning was the time in which Tom walked into his garden.) (p.41) であったりする。

更に、庭園での出来事の時間的順序が前後している。ある夜、突然の嵐が襲い、雷鳴とともに庭園のモミの木が燃え上って倒れるのをトムは目撃するのであるが、翌日の庭ではそのモミの木は元通り聳え立っている。庭園での遊び相手となった少女ハティの年齢にしても、トムと同じ位に見えたり、トムよりずっと小さくなったり、最後には成熟した娘になっている。

このような時間の不可思議な経験の中で、トムは「時間」とは何かという疑問を抱き始める。そしてハティのことばかり、トムの昼間の時間と、ハティと過す庭園での時間には違いがあることに気付くのである。

'I shall see you tomorrow.' said Tom.

Hatty smiled. 'You always say that, and then it's often months and months

before you come again.'

'I come every night,' said Tom. (p.146)

タイムシフトを扱った児童書では、現実の世界と異次元の世界との時間差は常道であり、トムの場合は2、3週間にわたる庭園の訪問が、ハティの時間の10年間くらいに当る。トムはアランおじさんに時間とは何かを質問する('What is Time — I mean, how does Time work?') (p.162) 一般に大人は全ての人に共通な時間を唯一の時間だと思いこんでいる。おじさんも風景を描く画家を例にとり、普遍的時間に基づく「時間の理論」(Time Theory)を説明しようとする。しかし、トムが知りたかったことは、「時間の性質」(the nature of time)であり、トムは自分自身の経験から既に時間の特色をつかみ始めていた。

'You might say,' Tom said slowly, coming into the conversation again without having been listening to it, 'You might say that different people have different times, although of course, they're really all bits of the same big Time.' (p.165)

だれの時間も1つの大きな時間の1部分であるが、人はそれぞれ別々の時間を持っていること。即ち、時間には全ての人に共通の普遍的な時間と、もう1つ個別的な時間があることを知った。

哲学者中村雄二郎氏は「岩波少年少女の本」の1冊である。児童文学書ミヒャエル・エンデの『モモ』の時間論に最も感心したと言い、「おそらく、『モモ』の話が、なにかわれわれの心に対して強く訴えかけてくるものがあるとすれば、そういう時間、人々が忘れてきたわれわれの生きられる時間というものに、童話という形をとることで痛切にふれているからではないでしょうか³⁾」と言っている。

個別的な時間とは、この生きられる時間、生きられた時間のことであり、トムもハティもそれぞれ自分の時間を持ち、他者の個別的な時間の存在を認めている。トムが裏庭で見ているのは、ヴィクトリア時代の風景と人物である。トムはハティの「生きた時間」(Hatty's lifetime)に何らかの理由で入って行けることを知り、同時にハティがトムの時間に入って来る可能性を推理している。

Tom went straight on. 'So that I might be able, for some reason, to step back into someone else's Time, in the Past ; or, if you like' — he saw it all, suddenly and for the first time, from Hatty's point of view — 'she might step forward into my Time, which would seem the Future to her, although to me it seems the Present.' (p.165)

トムが過去に後戻りしてハティの時間に入ることができたとすれば、逆にハティが未来に進んで来て、トムの時間の中に入ることができるということであるとトムはハティの立場に立って考えてみる。時間の論理としては不可能であるが、トムは庭園での時間の問題を理解するために、自分の推理を試している。ハティが使用しているスケート靴を、トムとハティの2人だけが知っている秘密の隠し場所に置くことを頼み、翌日そのスケート靴を約束の場所に見つけたトムは、それを自分の部屋に持ち帰る。それはハティがトムの時間に入ることができることを意味している。その蓋然性については大人の読者の批評に任せて、トムは捜していた「時間」の問題の解決を見い出している。

However long a time he spent in the garden, the kitchen clock measured none of it. He spent time there, without spending a fraction of a second of ordinary time. That was perhaps what the grandfather clock had meant by striking a

thirteenth hour : the hours after the twelfth do not exist in ordinary Time ; they are not bound by the laws of ordinary Time ; they are not over sixty ordinary minutes ; they are endless. (p.174)

トムが庭園で過ごす時間がどんなに長くとも、また短くとも、ホールに戻ってくるといつも真夜中であり、時間は進んでいない。13時以降の時間は普通の時間の中には存在しない限りない時間、時計では計れない時間であると考え、その時計では計られない、ハティと過ごす庭園での時間を永遠に自分の時間にしたいとトムは考える。

時間についてのこのようなトムの感想と願望をみる時、いくつかの時間に関する問題に焦点がしぼられてくる。個別的な時間と個人にとって忘れがたい時期と言える歴史的記憶の関連、個人の歴史と時間の永遠性、他者との個別的時間の共有である。

アパートでの最後の夜、裏口のドアをあけるが、そこには庭園もハティの姿も見い出せない。現実の世界と別世界との通路である裏口のドアでトムは、「ハティ！」と大声で叫ぶ。おじさんのアパートを去る日、トムはバーソロミュー夫人を訪れ、庭園での不思議な出来事は、このおばあさんの「思い出」であったことがわかる。おばあさんはその夏、子どもの頃の庭園での夢ばかりみていたこと、そしてトムがハティに会えなかった最後の夜には、結婚式の日の夢をみていたことを話す。おばあさんは過去の楽しい出来事ばかりを思い出していたのである。

バーソロミュー夫人がハティであったことがわかったが、夢の中に毎晩欠かさず庭園が現れたのは、おばあさんの力ばかりではなかったことがわかる。ハティはいとこ達から仲間はずれにされて、遊び相手を捜していたし、トムもアパートで退屈しきっていて、遊び相手と遊び場所がほしかったのである。おばあさんの話から、トムは庭園での生活を全て理解する。

‘But those were the things I wanted here, this summer,’ said Tom, suddenly recognizing himself exactly in Mrs Bartholomew’s description. He had longed for someone to play with and for somewhere to play ; and that great longing, beating, about unhappily in the big house, must have made its entry into Mrs Bartholomew’s dreaming mind and had brought back to her the little Hatty of long ago. Mrs Bartholomew had gone back in Time to when she was a girl, wanting to play in the garden ; and Tom had been able to go back with her, to that same garden. (p.215)

しかしながら、バーソロミュー夫人の夢の話しもトムの庭園での時間についての理解も、時間の問題を説明するには不十分で、失望させるものであり、スケート靴の約束のシーンにも矛盾があると Fred Inglis は指摘して、次の様に述べている。

So there is a fudging at the very heart of the novel. It will bother every reader, adult or child, who wishes to follow the author to the deep truths of which her eloquent, plain prose is capable. It is not enough to say, with the aestheticians of the romantic image, that time is a mystery and that it does not do to poke and pry too much into the meaning of a symbol. . . . So the picture of time in this novel is muddled.⁴⁾

この物語の中心にはごまかしがあり、時間の画像が乱れている。それはピアスの時間論が混乱しているからであると指摘している。しかし、ピアスの時間論が混乱しているのではないし、ピアスが作品のテーマとして時間の理論を説明しようとしたのでもないだろう。

ピアスはこの本を書く前に、J.W. Dunne の『時間に関する実験』 *An Experiment with Time*

(1927)を読み、その影響を自ら認めてはいるものの、(The Time theory... is not important to the book.)⁶⁾と言っている。ピアスにとって時間という問題は、その美学的面から捉えられる人間と、その人間個々の個別的時間のかかわりにおいて意味があるのであって、この作品にあるのは、Neil Philipの言うように、(It is essentially a drama of emotion, not incident; of image, not argument.)⁶⁾ここに見られるのは、時間についてのイメージである。

おばあさんはトムに、('When you're my age, Tom, you live in the Past a great deal. You remember it; you dream of it.')(p.214)と語る。おばあさんは子どもの頃の庭園での楽しい時期を思い出していたのである。過去というのは、個人の様々な体験が集積したものである。そしておばあさんにとってその中から思い出す価値のあるものが、夢として繰り返し現れて来たのである。おばあさんの生きた時間、おばあさんの個別的時間は、おばあさんにしか価値がないものである。しかしトムはおばあさんの過去を共有することができたのである。その方法について、児童文学者上野瞭氏は、次のように言っている。「ピアスはそこにドアを設定することによって、ただの個人的過去を、現在を生きる人間が共有できる別世界につくりかえる。」⁷⁾裏口の1枚のドアがファンタジーの世界への通路であるが、そのドアのむこうの別世界も現実の世界と同様に、細部にわたって詳しく描かれていて、トムにとっては別世界は、夢の世界ではなく、現在の自分の時間として楽しめるものになっている。

トムがバーソロミュー夫人と別れる時の様子をグエンおばさんが見ていて、おじさんに次のように話している。

Afterwards, Aunt Gwen tried to describe to her husband that second parting between them. 'He ran up to her, and they hugged each other as if they had known each other for years and years, instead of only having met for the first time this morning. There was something else, too, Alan, although I know you'll say it sounds even more absurd. . . Of course, Mrs Bartholomew's such a shrunken little old woman, she's hardly bigger than Tom, anyway: but, you know, he put his arms right round her and he hugged her good-bye as if she were a little girl.' (p.218)

バーソロミュー夫人は気むづかしい年寄りだと漠然と想像していたが、トムはその時、おばあさんの中にハティの存在を見出し、おばあさんを抱きしめたのである。おばあさんの個別的時間を知ったことは、おばあさんの人柄、存在を認め、そしておばあさんの価値を知ったことになると、ピアスは語っているのではないだろうか。他人の過去が現在の人間にとって価値があるということは、上野氏の言うように、人間のつながりを回復する道を開くものであり、「これは時間論でなく、人間論である」⁸⁾と言えよう。

III

大時計の裏に記されていた「時間がない」(Time no longer...)(p.160)という天使のことは、いかにも象徴的な響きを持っている。それはトムにとって、時間探究の旅の終末を意味する。トムは裏庭という高いレンガ塀で囲まれているいわば子どもの楽園での楽しい時を、最早享受することはできなくなった。「時間がない」ということは、人間は子どもから大人へ、大人から老人へと時と共に変化して行くものであり、永遠の時を手に入れることは、人間には不可能であることをトムは学ぶ。トムはおばあさんの夢から、人それぞれの過去、言い換えれば、人々の個別的時間の価値、そして人間の老いと言う時間の苛酷さを学んだであろう。

エンデの『モモ』の中で述べられている時間論について、中村氏は、時間というものはわれわれの回りを流れて行くものではなく、心で感じるものであるとするエンデの考え方に同意している。時間を感じる心というのは、目や耳での部分的感覚ではなく、「全人間的感覚」⁹⁾であると言っている。トムはその全人間的感覚で時間を感じ、誰にでも個別的時間があることを知ったのである。ピアスが描いているのは、トムの時間に関する感情であり、説明ではない。

われわれ大人の読者は、トムの中の「時」について合理的な説明をつけてみたり、「13時」の意味を考えたり、「バーソロミュー夫人の夢の中でも時は、現在の時だろうか」とか「スケート靴はトムの幻想だったのか」などと自問したりする。それは、大人は本の蓋然性—事柄が真実な否か—について、関心を持つからである。子どもはどうであろうか。イギリス児童文学者のマイルズ・マクドローウェル (Myles McDowell) は、「子どもは、ありそうなことであろうとなかろうと、話の筋の部分について合理的な説明を求めることは、殆んどないのである。物語の世界は身近に受けとられ、しかも図式的に一貫した全体として受けとめられるのである」¹⁰⁾と言っている。

大人たちは、時計ではかる時間になれすぎているから、それ以外の時を見失いがちである。子どもは、ファンタジーの世界を味わうことになれているから、別の時間を擱え、たのしむことができるのである。「時を〈時計〉からとり戻すことが、現代のファンタジーの試みである」¹¹⁾とするならば、ピアスの『トムは真夜中の庭で』は、その目的を十分果している。

注

- 1) Townsend, John Rowe: *Written for Children*, 247, Penguin Books (1977)
- 2) Pearce, Philippa: *Tom's Midnight Garden*, 119, Puffin Books (1977) [以下同書からの引用は全て引用箇所のあとにそのページを付す]
- 3) 中村難二郎: 「人間の時間について」, 図書, 341, 13, 岩波書店 (1978)
- 4) Inglis, Fred: *The promise of happiness: Value and meaning in children's fiction*, 260, Cambridge Univ. Press (1982)
- 5) Neil, Philip: 'Tom's Midnight Garden and the Vision of Eden,' *Signal*, 37, 22 (1982)
- 6) *Ibid.*, 25
- 7) 上野 瞭: 現代の児童文学, 77, 中央公論社 (1981)
- 8) 同上書, 78
- 9) 中村雄二郎: 前出書, 12
- 10) マイルズ・マクドローウェル: 「子どものための小説と大人のための小説」子どもの本と教育, 208, 玉川大学出版部 (1983)
- 11) 安藤美紀夫: 子どもと本の世界, 152, 角川書店 (1981)